

## <新刊紹介>鈴木貞男著『野の花の魂』：鈴木貞男 氏の世界

著者	梅地 和子
雑誌名	日本文学誌要
巻	57
ページ	184-185
発行年	1998-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020013">http://hdl.handle.net/10114/00020013</a>

鈴木貞男著

## 『野の花の魂』——鈴木貞男氏の世界——

梅地 和子

人間の持つ自己顕示欲を切り捨てて行

く人と膨張させてゆく人のあることを、

私は随分若い日に知った。以後、私の頑固な美学として謙虚を貫く秀才に引かれてきた。謙虚で、頭脳明晰な人間に出会った時感じる「ああつ」と心臓を刺してくる思いは、説明できない感覚である。

『野の花の魂』を読み進めて行くうち、気品ある文章であることに気付いた。私の感覚に伝わってくる「ああつ」という思い、それは見知らぬ作者の浮上でもあった。

『野の花の魂』は、鈴木貞男氏が昭和四九年（一九七四年）、氏五三歳のとき『野菊の墓』伊藤左千夫著についての講演を

掘り起こした秀作である。

新潟県立新発田病院付属高等看護学院生に、昭和四十九年十月九日から同年十一月十三日まで、六回に亘って語ったものである。

七〇年闘争も影が薄れ高度経済成長期も終わった日本だった。停滞期にひっそりと看護婦になる希望を胸に秘めた少女たちへ向かつての語りであった。看護婦を目指し胸を膨らませる生徒に『野菊の墓』——純愛を教え込んでゆく姿勢は、氏の純粋な魂の響きとして感動を呼ぶ。日本はエリート医師の天国である。破格の経済力と超上等な頭脳を持った人間たちの橋の無い天国である。そこでわずかに

橋の一端に佇むことの許された普通の人間としての看護婦。具体的な人間的接触による癒しによって患者にのみ敬服される存在。そして、その看護婦に対して医学界は別世界の一線を固く崩さない。医師と患者の狭間にあつて、絶望し去つてゆく看護婦が多いと聞く。

氏はそうゆう背景を充分理解していればこそ、その純粋な生徒たちに立ち向かつて強い信念を求めた。裏日本の小さな街に夢の蕾を咲かせようとしている氏の情熱、『野の花の魂』は鈴木貞男氏の魂そのものであるといえよう。後半の「手紙を送った人人」によって、それがより明確に写し出される。『野の花の魂』という自然体の人柄の持つ魅力、つまり詩人であることを随所に彷彿させているこの本。生より遙かに強い純愛中の死の衝撃。来る歳ごとに思い出の形見として政夫の民子へ抱く疼き。氏は看護学院生へ『野菊の墓』を通して祈っているようだ。看護婦は天使であつて欲しいという祈り……。純愛のすばらしさを、見返りを求めない愛を、たっぷり秘めた存在として成長することを望んだ祈りであつたはず

だ。

氏は「民子の最後の言葉に、野の花の魂のように、ひっそりとした美しさと勁さがあつた」と感動的に語つて止まない。この言葉は氏の魂そのものに違いない。「何にしても人間が尊厳を持つて生きるということのすばらしさ」、鈴木貞男氏の人生を知り尽くした言葉に「ああ」とはつきり感じた。

〈傷深き人は叫ばず野の花の魂見つめ風を遊ばす〉

(うめち かずこ・一九六五年卒)

▽一九九七年武蔵野書房刊・二〇〇〇円

▽著者 一九五一年卒

小林裕子著

## 『佐多稲子——体験と時間』

本書は三部構成になっている。Iは「人と文学」「習作詩の時代」で、佐多稲子という作家の原点的体験と、そこから生まれた作品のモチーフについて、IIは『素足の娘』『樹々新緑』『虚偽』『泡沫の記録』『私の東京地図』『灰色の午後』『女の宿』『時に佇つ』『夏の葉』などの作品論で、戦後という時間の流れの中でその体験の意味がどう変容したかを論じている。またIIIは「マントという記号」「抵抗としての素足」「坂道のなかば」「動作と身ぶり」「風と雨」などそのタイトルからもわかるとおり、一つの記号を手がかりに新たに作品を読み直したものである。ここに収録された一四編の論は、一九八

岡野 幸江

一年から九七年までの一七一年間に発表されたものだが、本書を通読するとこの間の著者の研究の深化を感じさせられるのも確かだ。

小林氏は「佐多稲子の人生と文学にあって決定的な体験」として「革命運動への参加と、戦争協力的行為」をあげ、「戦後になってからは、佐多稲子の自伝的作品のほとんどが、この二つの体験への固執をうかがわせる」とし、これほどその体験にこだわり、それを作品化していった作家は稀であろうと述べて、その点を粘り強く追跡してきたといえる。つまり小林氏の研究の大きなモチーフの一つは、佐多稲子が自身の戦争責任とどう向